

特別起稿

日本伝統文化学科
庄司達也先生

芥川龍之介「鼻」発表から 100 年

2016 年は、芥川龍之介が師と仰ぐ夏目漱石にその才能が認められて、丁度 100 年目の年にあたります。100 年前の大正 5 年 1 月の芥川は、憧れの漱石先生に読んでもらおうと、大学に提出すべき卒業論文「ウィリアム・モリス論」の執筆をひとまずは横に置き、同人雑誌『新思潮』の創刊号に発表する「鼻」に全勢力を傾けて向き合っていました。その結果、2 月に創刊された同誌を読んだ漱石から絶賛され、文壇にその名が知れ渡ったのでした。



夏目漱石没後 100 年

2016 年は、日本の近代文学を代表する作家、夏目漱石が亡くなってから 100 年目にあたります。漱石にゆかりのある土地では、さまざまに記念の行事が計画されているようです。そのなかでも一番に注目されているのは、新宿区が呼び掛けて生誕 150 年の 2017 年の開館に向けて準備が進められている「漱石山房記念館」（仮称）の建築プロジェクトではないでしょうか。基金への寄附も募っており、目標額は 2 億円。漱石終焉の地での記念館建設が計画通りに進みますことを、漱石文学のファンであり、近代文学を勉強する身の 1 人としても願っています。



<本づくりのリテラシーその2>

海保図書館長より・・・

売上アップ？

「ブックカバーのデザイン」

表紙にかぶせるカバーは、本の顔です。これ専門のデザイナーがいます。内容そのものズバリ！のデザインや、内容を暗示するデザイン 誘目性を高めるデザイン などなど。

デザインが売り上げを左右するようなこともあるようですが、読者としては、内容と一緒に記憶（頭の中と本棚）しておくことに役立ってます。あのデザインのあの本、どこにあるかなーというような探し方をするとき役立ちます。

むろん、本の本体を汚れや傷みからカバーする役割もあります。

